

平成 21 年 5 月 25 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2008

課題番号：19520345

研究課題名（和文）日・仏・ルーマニア語対照による与格の認知機能的な研究

研究課題名（英文）A Contrastive and Cognitive-Functional Study on Dative in Japanese, French and Romanian

研究代表者

林 博司 (HAYASHI HIROSHI)

神戸大学・大学院国際文化科学研究科・教授

研究者番号：40135819

研究成果の概要：文中の名詞が述語と結ぶ意味関係を形の上で表す「格」の一つである与格の中でも、仏語を学ぶ日本人学習者が苦手とする非語彙的与格（述語が必須成分として要求しない与格）に焦点を当ててそのメカニズムを研究した。仏語では、その意味に結果を含む述語を中心とする文にこの与格が現れること（「二次叙述仮説」）、ルーマニア語では、述語の意味よりもこの与格が受けている名詞の「主題性」がこの与格の出現に関与していること、日本語ではこの与格は間接受動文の主語に相当し、ルーマニア語と同様に「主題性」が重要なポイントとなることを明らかにした。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,100,000	330,000	1,430,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：与格、語彙概念構造、プロファイリング、主題性

## 1. 研究開始当初の背景

仏語、ルーマニア語を学ぶ日本人学習者が非常に苦手とする項目に、次の文中に現れる与格がある。

a. Taro lui a coupe les cheveux (à Hanako).b. Taro i-a taiat parul (lui Hanako).

(彼女(花子)は太郎に髪の毛を切られた)

ここで出てくる与格は「切る」の必須要素(項)ではない(項は「太郎」と「髪の毛」のみ)。花子を受ける与格(仏語: lui ル語: i)は英語では“her”のような所有形で現

れる。この現象をどう説明すればいいか、というのがこの研究のきっかけであった。

他方、上記 a と b に相当する日本語 c ではいわゆる間接受動文の主語として現れる。

c. 花子は太郎に髪の毛を切られた。

この「花子」と仏語、ルーマニア語で与格として現れる“Hanako”の関係を言語学的に解明したい、というのが当研究の背景であった。

## 2. 研究の目的

どの言語にも、名詞と述語の意味関係を表す言語要素があるが(格)、その現れ方は多様であり(日本語:後置詞(格助詞)、中国語:語順(+前置詞)、英語:語順+前置詞、ラテン語:名詞の語形変化)、またその意味基盤も多様である。本研究の最終目的は言語普遍性の観点からこの「格」の本質を探ることであるが、具体的分析の手始めとして、格の中でも一番性格が曖昧な与格を取り上げた。方法論的には、形式より意味に基盤を置く認知言語学の立場に立つとともに、比較・対照言語学の考え方をういた。言語系統を同じくするフランス語とルーマニア語、そしてこの二者と系統を異にする日本語を比較・対照することにより、三者間の共通点・相違点を洗い出して与格の本質に迫ると共に、分析に使用する概念装置(意味概念構造等)の精緻化を図るのももう一つの目的である。

## 3. 研究の方法

### (1) 理論的枠組みの構築

格を担うのは名詞であり、格関係を指定するのは述語(特に動詞)である。従って、名詞と動詞の分析が重要になってくる。本研究では特に動詞に焦点を当てて、動詞分析の有力な理論的枠組みである「語彙概念構造」(Lexical Conceptual Structure)の精緻化を図る。また名詞についても「アニマシー」(Animacy Scale)、「分離不可能性」(Inalienability)といった概念の検証を行う。更に文全体、或いは談話という観点から「主題性」(Topicality)の果たす役割も検証する。

### (2) データの収集

日本語については主に間接受動構文を中心に、様々な文献、インターネットを通じて実例を採取した。フランス語については、日本語同様、様々な文献やインターネットを通じて用例を採取すると共に、ネイティブの知識が必要な部分についてはインフォーマントの助けを借りた。ルーマニア語については、文献も少なく、日本で利用できるインフォーマントの数も少ないので、ルーマニアのクルージュ・ナポカ市でインフォーマント調査を行う予定であったが、研究協力者であるバベシュ・ボヨイ大学文学部言語学科エマ・タマイアヌ准教授(当時)の辞職により実施が不可能になった。そこで筆者が学術振興会のプログラムで約1年滞在したバベシュ・ボヨイ大学で収集したデータを基にし、日本国内のルーマニア語母語話者、メールで連絡できるルーマニア在住のルーマニア語母語話者にインフォーマントになってもらった。

## 4. 研究成果

### (1) フランス語の非語彙的与格

#### ① 拡大与格

例えば“donner”(与える)という動詞と一緒に用いられる与格は、動詞が要求する必須成分であり、[Theme]という意味役割を持つ名詞(句)の着点を表すという役割を果たす、ということはすぐ理解できる。しかし次の(a)に現れる与格(lui)については話はそれほど簡単ではない。

(a) Paul lui a cassé son vaisselle.

このタイプの与格は動詞によって選ばれたものではない(つまり非語彙的与格)ので動詞と直接の意味関係は結べない。そうするとこの与格の役割は何か、ということが問題になる。更に、次の例でも分かるように、このタイプの与格の出現には大きな制約がある。

(b) \*Je lui ai regardé son tableau.

(c) \*Le vase lui a cassé.

従って非語彙的与格の問題を考える場合、この与格が果たしている役割とこの与格が出現する条件の二つを解明する必要がある。以後このタイプの与格を Leclère にならって拡大与格と言うことにする。

フランス語には拡大与格とよく似た(d)のような与格も存在し、これを拡大与格とは区別して「所有の与格」と呼ぶことがある。

(d) La mère lui a lave les mains.

確かにこれら二つのタイプにはいくつかの相違点が見られるが(例えば、代名詞形とa +NP形の許容度の違い、被所有物につく所有形容詞と定冠詞の違い)、述語によって選択されない与格が意味的に全体に統合されるという本質的な性質は同じであり、また、両者の違いは「分離不可能性」の違いに起因すると考えられるので、本研究では両者を区別せず、共に拡大与格と呼ぶことにする。

#### ② 拡大与格の機能

今ジャンがマリイの腕をつかんだ、という状況をフランス語で表すと、マリイは所有形容詞で表される場合(e)、直接目的語(対格)で表される場合(f)、拡大与格で表される場合(g)、の三通りが可能である。

(d) Jean a saisi son bras.

(e) Jean l' a saisi par le bras.

(f) Jean lui a saisi le bras.

これらの違いは認知言語学で用いられる「プロファイリング」という概念で説明できる。つまり話者はある出来事のどの部分に関心を抱いているか、によって様々な表現形態(或いは構文)を使い分けることができる。上記の例では腕を捕まれたマリイがこの出来事にどの程度関与しているか、その度合いに関する話者の認識が三つの構文の違いとなって現れているのである。まずマリイが所有形(つまり属格)で現れている(d)では「掴

む」という行為を直接受けた「腕」がプロファイリングされ前景に押しだされており、マリイは背景に退いている。逆に、マリイが対格に置かれている(e)ではマリイが行為の直接対象としてプロファイリングされており斜格に置かれた腕は背景に後退している。つまり、所有者が前景、身体部分が背景である。そしてマリイが与格に置かれている(f)では所有者のマリイも身体部分である腕もプロファイリングの対象になっている。勿論直接目的語になっている腕の方が行為をより直接に受けているのだが、肝心な点は、被所有物である身体部分の腕と共に、所有者であるマリイも前景に置かれている、ということである。つまり、この与格の役割は、身体部分を通じて、身体部分の所有者もある行為から大きな影響を受けている、と話者が認識していることを相手に伝えることである、と言える。

### ③二次叙述

以上の意味的分析をどのように形式的分析に対応させるかを考える前に「二次叙述」という概念を簡単に述べる。「二次叙述」とは次の例文に見られるように、主動詞を中心に形成される主・述関係(一次叙述)とは別の主・述関係のことをいう。

(g) 太郎は壁を赤く塗った。  
この文には「太郎が壁を塗る」という一次叙述の他に、その結果「壁が赤くなった」という二番目の叙述関係が含まれている。また、次のフランス語の文にも二次叙述が含まれ、その形の違いが“lui”と”y”の使い分けに対応していると考えられる(Herslund)。

(h) J' ai laissé mon vélo à la gare.

(i) J' ai laissé mon vélo à Marie.

(h)には[vélo ETRE à la gare] (自転車が駅に存在する)という二次叙述が、(i)には[Marie AVOIR vélo] (マリイが自転車を持っている)という二次叙述が含まれており、この[ETRE]と[AVOIR]の違いが[a+NP]が”lui”で受けられるか”y”で受けられるかの違いを引き起こしているという訳である。

(j) J' y ai laissé mon vélo.

(k) Je lui ai laissé mon vélo.

### ④二次叙述仮説

前にも述べたように、拡大与格の出現に関しては動詞の意味分類が大きなポイントとなる。今、Vendlerの動詞の4分類と拡大与格との関係を示すと以下ようになる。

<State>

(l) \*Le vieux lui sait son nom.

<Activity>

(m) \*Son bébé lui a pleuré toute la nuit.

<Achievement>

(n) \*Le vase lui a cassé.

<Accomplishment>

(o) Jean lui a cassé le bras.

原則的に<Accomplishment>動詞(達成動詞)のみが拡大与格を許す。達成動詞と他のタイプの動詞との違いを知るには語彙概念構造(Lexical Conceptual Structure、以降LCSと表記)が役に立つ。

(1) [le vieux BE AT-KNOWLEDGE OF nom]

(m) [son bébé ACT]

(n) [[vase BECOME [vase BE AT-BROKEN]

(o) [Jean ACT ON bras] CAUSE[bras BECOME[bras BE AT-BROKEN]]

これらのLCSから明らかのように、達成動詞のみがそのLCSに二次叙述(CAUSEの右辺)を含む。そこで以下のような「二次叙述仮説」を提唱した。

#### 【二次叙述仮説】

「拡大与格はそれが現れる文の述語のLCSに含まれる二次叙述と密接な関係を持たねばならない。」

この「密接な関係」とは所有関係であり、この関係により、与格に置かれている名詞(所有者)が述語が表しているプロセスに関与し前景に置かれプロファイリングを受けていることが保障される。

### ⑤仮説に対する制約

この仮説に対する反例はおおよそ2種類ある。一つは二次叙述を持つにも拘わらず拡大与格が現れないもの、或いは現れなくても良いもの、もう一つは二次叙述を持たないのにこの与格が現れるものである。前者の例として次のようなものがある。

(f) Jean lui a saisi le bras.

(d) Jean a saisi son bras.

これは前にもあげた例であるが、(f)の他に(d)も許容される(或いは(e)も)。これに対して次の例では拡大与格以外は出現できない、或いは出現しにくい。

(p) Jean lui a cassé le bras.

(p') ??Jean a cassé son bras.

この現象を説明するため「他動性制約」を提唱した。これは「述語の他動性が高いほど拡大与格は出現しやすい」ことを表す。従って、他動性が高い”casser le bras”(腕を折る)の場合は、話者は被害者を背景に残したまま腕だけを前景に出すことはしにくい、ということを示している。もう一つの例は次のようなものである。

(q) Je lui ai donné un coup de pied au cul.

(r) \*Je lui ai donné un coup de pied à sa table.

これは他動性の観点からは同等であるが「分離不可能性制約」の適用を受ける。この制約は「被所有物の分離不可能性が高いほど拡大与格は出現しやすい」ことを規定している。

「他動性制約」は述語に対する制約、「分離不可能性制約」は被所有物に対する制約であったが、この他に、所有者に対する制約である「アニメーション制約」、談話的性格に対する「主題性制約」を提唱した。

#### ⑥非プロトタイプ

「二次叙述仮説」はいわば拡大与格構文のプロトタイプを規定したものであった。そして、二次叙述を持つにも拘わらず拡大与格が出現しないケースを「制約」という形で説明した。ここではもう一つのタイプの「反例」を見る。それは、二次叙述を持たないのに拡大与格が現れるケースである。紙幅の関係で一つだけ考察する。

(s) La petite boule de neige lui a fondu sur l' épaule.

(s') [neige BECOME[neige BE AT-WATER]]  
例(s)は、そのLCSに見られるように二次叙述を持たない。それにも拘わらず拡大与格が出現している。これは、雪が溶けて水になったというプロセスのみならず、その水が彼/彼女の肩に留まり肩を濡らし、彼/彼女が何らかの影響を受けた、ということを手相に伝えるため、話者がLCSに[WATER BE AT-épaule]という二次叙述を付け加えた（この操作を「合成」という）ためだ、と解釈できる。話者が単に雪解けというプロセスのみを伝えたい場合は拡大与格を用いずに”sur son épaule”とすることも可能である。

このケースは「結果の焦点化」という「合成」操作によるものであるが、他に「含意の焦点化」、「潜在的結果の顕現」、「潜在的原因の顕在化」という三つの「合成」操作を提唱した。

#### (2) ルーマニア語の非語彙的与格

##### ① フランス語との比較

前節で見たように、フランス語の拡大与格は達成動詞に典型的に含まれる二次叙述と関係を持ち、二次叙述を含まない非プロトタイプは達成動詞型を一種の「鋳型」として意味合成により生成される。ところがルーマニア語ではフランス語と違って全てのタイプの動詞を含む文にこの与格は現れる。

<State>

(i)\*Toute la maison lui est pleine de trésors.

(ii)Toata casa i-e plina de odoare.

<Activity>

(iii)\*Son bébé lui a pleuré toute la nuit.

(iv)Copilasul i-a plâns toata noapta.

<Achievement>

(v)\*Le vase lui a cassé.

(vi)Vasa i s-a spart.

<Accomplishment>

(vii)Jean lui a cassé son verre.

(viii)Ion i-a spart paharul.

このように、全てのタイプの動詞と共起できる以上、ルーマニア語には「二次叙述仮説」は適用できないことになる。しかし、ルーマニア語でも全く自由に拡大与格が現れる訳ではない。

(ix)\*/? Pruncul i-a plâns în bratele mele.

(赤ちゃんは私の腕の中で泣いた)

(x) \*Mi-am oferit lui Ion serviciile.

(私はイオンにサービスを提供した)

ルーマニア語の拡大与格は全てのタイプの動詞と共起できるのであるから、前節の⑥で見たような問題は起こらない。従って、拡大与格に対する「制約」という観点からの説明が有効である。

この「制約」の問題を考える前に、本研究で提唱した「拡大イベント」という概念についてごく簡単に説明をする。

#### ② 拡大イベント

Talmy は次の(xi)のように、意味的にも統語的にも一つの単位で表されるイベントを「単一イベント」、(xii)のように意味的にも統語的にも二つ以上の単位で表されるイベントを「複合イベント」、そして(xiii)のように統語的には一つだが意味的には二つの単位を含んだものを、イベント統合を受けた「マクロイベント」と呼んだ。

(xi) 花瓶が割れている。

(xii) 太郎が花瓶を蹴り、花瓶が割れた。

(xiii) 太郎が花瓶を割った。

ところで本研究の対象である拡大与格は、述語によって選択されない要素であり、意味的には命題に含まれないのであるが、形態-統語的には与格代名詞という形で命題内に取り込まれている。これはマクロイベントと似た状況であるが、マクロイベントはあくまでイベント間の統合であるのに対して、拡大与格の場合はイベントはあくまで一つである。

(xiv)Jean lui a cassé son vase.

(xv) [lui] ↔ [Jean a cassé son vase]

本研究ではこの(xiv)のようなタイプを「拡大イベント」と呼んだ。従来項構造から外れた要素を持つ文は、拡大与格構文、所有者上昇構文、間接受動構文、(二重)主題構文というように、構文毎にバラバラに考察されてきたが、項以外の要素は主イベントの中に何らかの「とっかかり」(多くは所有関係に基づいている)を持っており、それを基にこの要素は主イベントに統合される、という点では共通している。「拡大イベント」という概念を提唱したのはこの共通性を捉えるためである。従って、本研究の対象であるフランス語、ルーマニア語の拡大与格の主命題への統合はそのケーススタディの一つ、ということになる。

### ③ 分離不可能性

Timoc-Bardyによると、次の例は三つの読みが可能である。

(xvi) Tatal îi lucreaza.

- (a) 彼(i)の父は働いている。
- (b) 彼(ii)の父は彼(ii)のために働いている。
- (c) (彼(i)以外の誰かの)父は彼(ii)のために働いている。

このように、原則的に拡大与格の係り先は自由で、これを決めているのは語用論的要因である。しかし、データをよく観察すると、全く自由という訳ではなく意味論的に裏付けられた一種のハイエラキーが存在する。他動詞構文では直接目的語に係るケースが圧倒的に多いが、以下のように直接目的語が存在しても前置詞句の名詞に係ることも結構多い。

(xvii) Marko a luat vada de parul ei roscat si i-a infipt cuiul în gât.

(マルコは未亡人の赤い髪の毛を掴んで彼女を押さえ、喉に釘を突き刺した)

ここでは拡大与格(i)は直接目的語の釘(cuiul)ではなく、前置詞句内の喉(gât)に係っている(即ち彼女の喉)。ここで働いているのは身体部分(分離不可能所有物)が優先されるという制約である。このことは次の例からも見て取れる。

(xviii) Maria mi-a dormit în brate.

(マリアは私の腕の中で眠った)

(xix) \*/? Pruncul i-a plâns în bratele mele.

(赤ちゃんは私の腕の中で泣いた)

(xviii)は5人のインフォーマント全員が的確との判断を下したが、(xix)はOK:1, ? :1, \*:3であった。身体部分を表す腕(bratele)には既に「私の」という所有詞(mele)がついているため与格の係り先が宙に浮いてしまった格好になり不適格という判断に結びついたものと考えられる。適格と判断したインフォーマントは、係り先に「赤ちゃん」(pruncul)を選んで「私の赤ちゃん」と解釈したが少数派である。

このように、直接目的語、前置詞句といったような統語的要因よりも、「分離不可能性」という意味的要因が優先することが分かった。

### ④ 受影性

フランス語の場合は、拡大与格は二次叙述で示されている変化によって影響(被害又は受益)を受けた主体として全体の統合され拡大イベントを形成するため、「受影性」を決定する「他動性制約」が大きな役割を果たしている。ルーマニア語でも拡大イベントへの統合は多くの場合「受影性」が関与していると考えられる。というのは、他動性が高く「受

影性」が容易に観察される達成、他動詞活動動詞(LCSに[ACT ON]を含む述語)だけではなく、到達(Achievement)、自動詞活動タイプにも「受影性」またはそれに近いものが見られるからである。

(xx) Curând însa si-a dat seama ca îi slabeste vederea.

(しかしすぐに彼は相手の視力が弱まっていることに気づいた)

(xxi) I-am intrat în camera.

(私は彼の部屋に入った)

(xx)は到達、(xxi)は自動詞活動の例だが、前者では与格(ii)が視力が弱まっていることに被害を感じていることが読みとれるし、後者では単に私が彼の部屋に入ったことが伝えられているのではなく、彼は部屋に入られて困っている、ことを述べている(インフォーマントの解釈)。次の例も同様である。

(xxii) Maria mi-a dormit în pat.

(xxiii) Maria a dormit în patul meu.

拡大与格の出ている(xxii)は「私はマリアに私のベッドで寝られた」という読みになるのに対して、(xxiii)は単に「マリアは私のベッドで寝た」という単なる状況描写である。ただ状態述語の場合、フランス語ではそもそも「二次叙述仮説」によって拡大与格の出現は阻止されるので問題は無いが、ルーマニア語の場合、拡大与格構文は状態述語の時も適格で、この場合「受影性」は説明力を失う。事実、インフォーマント全員が以下の二つの例の間には差異を感じなかった。

(xxiv) ...doamna care mi-a fost colega de facultate

(xxv) ...doamna care a fost colega mea de facultate

(私が大学時代同期だった女性)

以上見たように、「受影性」はフランス語ほどは重要な制約ではない、ということが分かった。ここで気を付けるべきは、拡大与格と所有詞の違いである。これは「主題性」と大きく関わる。

### ⑤ 主題性

先行研究によれば、所有者の主題性が高く話題になっている時は所有者は与格で表され、主題性が低く焦点や新情報を表している時は所有詞が用いられる。例えば、例(xxvi)では間接目的語「イオンに」(lui Ion)が新情報で直接目的語「私のサービス」

(serviciile)は旧情報になってサービスの所有者「私」は与格に置かれている。

(xxvi) Mi-am oferit serviciile lui Ion.

(私がサービスを提供したのはイオンです)

ところが、直接目的語を後置してそこに焦点を当てると所有詞「mele」が用いられ与格は不可になる。そして新しく、旧情報「イオンに」に対応する与格(i(ii))が出現する。

(xxvii) I-am oferit lui Ion serviceiile mele.

(私がイオンに提供したのはサービスです)  
(xxviii) \*Mi-am oferit lui Ion serviciile.  
以上のように、与格は主題性の高い所有者として主語に次ぐ「第二主題」として出現するのであるが、その性格が顕著に現れるのは他動性の低い文である。他動性が高い場合は「受影性」の側面が強く出る。従って、他動性の高い(xxix)では与格は「受影者」として所有詞と共に起るが、他動性の低い(xxx)では与格は「受影性」を表すことができず「主題性の高い所有者」を表すため、所有詞とは共起できない。

(xxix) Ti-am murdarit paltonul lui.

(私は彼のオーバーを汚して君に迷惑をかけた)

(xxx) \*Ti-am admirat paltonul lui.

(私は彼のオーバーをほめて君に迷惑をかけた)

以上を総合すると、拡大与格が主イベントに統合されて拡大イベントを形成する際、その統合はフランス語においては「受影性」に基づいて行われるのに対して、ルーマニア語では「受影性」の他に「主題性」の高い所有関係に基づいて行われ、それ故フランス語に比べて広範囲に拡大与格が出現できる、ということになる。

### (3) まとめと展望

フランス語の非語彙的与格(拡大与格)の特徴は、(a)達成タイプをプロトタイプとする二次叙述を持つ文にしか出現できないし、これに対しても強い制約が課せられる、(b)拡大与格の係り先は、原則的に、自動詞構文では主語か前置詞句の名詞、他動詞構文では直接目的語である、(c)主イベントに統合される要因は主に所有関係を通じた「受影性」である。それに対してルーマニア語では、(a)全てのタイプの述語を持つ文に出現できる、(b)係り先は統語的要因よりも分離不可能性が優先され、それ以外はコンテキスト等の語用論的要因によって決まる、(c)主イベントへの統合は「受影性」の他に「主題性」の高い所有関係に基づいて行われる。この「主題性」は重要で、日本語の間接受動文との接点でもある。

日本語の間接受動構文は、ルーマニア語の拡大与格構文と同様、かなり生産性の高い構文である。それは、間接受動文の主語が「主題」を表すことに由来する。但し、やはり全く自由という訳ではなく、いくつかの制約のもとにある。そしてその制約はフランス語・ルーマニア語とは違った性質を持つことも多い。例えば、「アニメーション制約」は日本語ではむしろ所有物にかかる制約と考えた方

がいい。

(7) 僕は妻に倒れられた。

(i) \*僕は看板に倒れられた。

もう一つの日本語の特徴は、到達動詞の中の非対格動詞が間接受動構文をシステムティックに拒むことである。

(ii) \*僕は洗濯物に乾かれた。

一方ではフランス語・ルーマニア語の制約、他方では日本語の制約、これらを類型論的に考察するには何らかの共通の「物差し」が必要である。

また、紙幅の関係で詳しく述べることができないが、フランス語・ルーマニア語の「モノ」中心表現、日本語の「コト」中心表現という叙述類型の違いも関係してくる。特に、意味的には命題の外に位置ながらも、統語的には命題内に統合されるフランス語・ルーマニア語の拡大与格、意味的にも統語的にも命題の外に置かれる日本語の間接受動文主語、という特徴は叙述類型的考察に大きな寄与を果たすと期待される。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計 1 件)

①

発表者: 林 博司

発表表題: The Extended Dative in French and the Hypothesis of Second Predication

学会名: The 4<sup>th</sup> Oxford Linguistic Seminar

発表年月日: The 1<sup>st</sup>. April 2008

場所: St Catherine's College Kobe Institute

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

林 博司 (HAYASHI HIROSHI)

神戸大学・大学院国際文化科学研究科・教授  
研究者番号: 40135819

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし